

ニシキギ科植物の花序のつき方

清水 建美

T. Shimizu: Position of the inflorescences in the Celastraceae

日本産のニシキギ科植物は、ニシキギ属・モクレイシ属・ツルウメモドキ属・ハリツルマサキ属・クロツル属の5属27種がある。

ニシキギ科の花序は、集散花序または複合集散花序である。上記5属のうち、クロツル属の花序だけは今年枝に頂生する円錐形の複合花序であるが、他の4属では集散花序はすべて今年枝に腋生する。腋生といえは、ふつうは葉腋につくことであり、図鑑類にはニシキギ科の花序は葉腋につくと書かれている。ところが、ニシキギの花序をみると、葉腋についている花序もあるが、葉の位置よりさらに下についているものもある。マユミでは葉腋につくものは一つも見当らず、花序はすべて今年枝の基部と最下の葉対の間についている。これらの葉から下につく花序は、たまたま葉が落ちたためにそうみえるのではない。よくみると、これらの花序のつけ根にはふつうの葉柄痕はなく、代りに鱗片葉の落ちた痕がみつかる。つまり、これは、芽鱗の落ちた痕であり、花序は芽鱗の腋についたものであることが分る。その証拠に、常緑のモクレイシでは通常葉のみならず、芽鱗も宿存していてその腋に確かに花序がついているのである。これらのニシキギ科植物では、枝の発生のごく初期から花序の発生が始まるものと思われる。こゝでは、このような花序を芽鱗腋生の花序とよび、ふつうの葉腋生の花序と区別しておきたい。

ところで、このほど機会があってニシキギ科植物の花序のつく位置、つまり腋生する位置を調べてみたところ、次の3型があることが分った。

第1型 花序が葉腋生であるもの

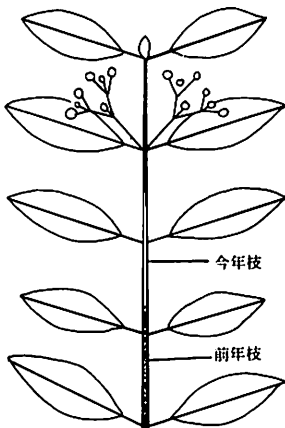
第2型 花序が葉腋生および芽鱗腋生であるもの

第3型 花序が芽鱗腋生であるもの

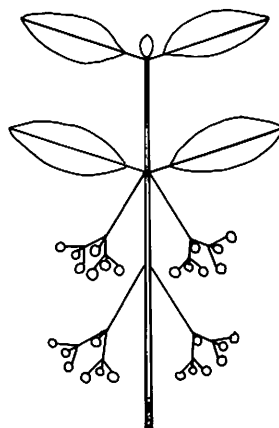
第1型、たとえばマサキ。マサキは常緑性で葉は2~4年生であるが、花序は今年枝の2~4対ある葉対の上方の葉腋、すなわち第2、第3葉対の腋につき、常に葉腋生である。これに対して、ツルマサキやヒメマサキは葉腋生のもののほか、芽鱗腋生の花序をもつので、花序さえあれば1本の枝だけでもマサキとツルマサキの区別は容易にできる。

第2型、たとえばツリバナ。年枝の葉は1,2(~4)対あるが、花序は最下の1,2対の葉腋およびそれより下の芽鱗腋につく。ニシキギの葉は1~6対もあり葉腋には事欠かないが、最下の1,2対の葉腋およびそれより下の芽鱗腋に花序がつく。ツルウメモドキ属では、一つ一つの花序は大へん短いが、花序はいずれも葉腋生および芽鱗腋生である。

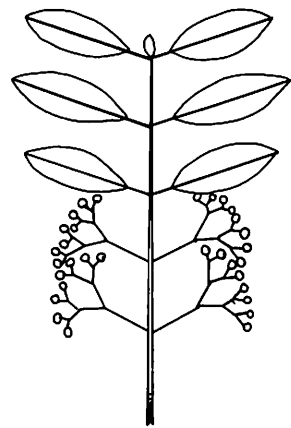
第3型、たとえば前述のようにマユミ。マユミの葉は1~4対、コマユミ同よう葉腋には事欠かないが、花序は常に芽鱗腋生である。マユミの花序が芽鱗腋生であることは、ふつうの図鑑などにはふれられていない。



マサキ (葉腋生)



ツリバナ (葉腋生と芽鱗腋生)
ニシキギ科の花序のつき方



マユミ (芽鱗腋生)

ニシキギ科植物の分類体系と花序のつき方

	分 類 群	種類	第 1 型	第 2 型	第 3 型
ニシキギ科	ニシキギ属	ニシキギ節	4	ニシキギ・リュウキュウマユミ	
		コクテンギ節	1	コクテンギ	
		マサキ節	3	マサキ	
		マユミ節	5	ムラサキマユミ・アンドンマユミ サワダツ	マユミ・ヒゼンマユミ
		ツリバナ節	5	アオツリバナ	クロツリバナ
	モクレイシ属	1		モクレイシ	
亜科	ツルウメモドキ属	5		イワウメツル・ツルウメモドキ リュウキュウツルウメモドキ テリハツルウメモドキ オオツルウメモドキ	
	ハリツルマサキ属	1	ハリツルマサキ		
クロヅル亜科	クロヅル属	2			

上に述べた花序のつき方を、種ごとに分類体系と対応させながら表にまとめた。ただし、この表にはクロヅルは当然登場しないし、ヤンバルマユミおよびトゲマサキの2種は標本をみていないので省いてある。それによると、ニシキギ科植物の花序について

- (1) ニシキギ属には第1～第3型が認められるが、ツルウメモドキ属は第2型に限られること

- (2) ニシキギ節は第2型に限られるが、マサキ節・マユミ節・ツリバナ節には2～3型があること、したがって花序のつき方は必ずしも節の特徴とは認められないこと

- (3) マユミ節では、第1型と第3型があるが、中間型といえる第2型がないこと
などが注目される。

作図を引き受けられた山本雅道氏に深謝する。

〔植物ニュース〕114. ヒメホテイラン *Calypso bulbosa* (L.) Oakes

日本では青森県の下北・津軽の両半島と北海道の定山溪にだけ知られていた。1987年5月2日に平出暢氏と釜無で発見する。本種は、本州中部に稀産するホテイランと大変よく似ていて、うっかりすると見落してしまう。差異は唇弁の基部と距の先とがほとんど同じのが本種で、距の先が長く突出するホテイランと区別する唯一の差異である。本種はカラフトからシベリアを経てヨーロッパの針葉樹林に、アリューシャン、アラスカを経て、北アメリカの東部およびカルフォルニアにまで広く分布している。日本ではヒメホテイランはきわめてめずらしいものであるが、世界的には広く分布していて、これが基本種となっている。いずれにせよ、青森から釜無までとんで分布することになる。

前川文夫氏の原色日本のランによると、本種は青森で花期が5月上・中旬とあり、釜無でも5月2日にすでに花期が過ぎようとしていた。ホテイランの

花期はこの地方では5月下旬から6月上旬である。

したがってヒメホテイランの方が花期が約1ヶ月早いことになる。(今井建樹)

